

モンゴルは今「国家建設の工事中」

一経済、社会資本整備、渋滞・大気汚染など課題抱え

労働ペンクラブ代表 稲葉康生

日本労働ペンクラブのモンゴル訪問団（27人参加）として2016年9月12～15日、首都ウランバートルを中心に取材と観光をしてきた。

首都ウランバートルでは、モンゴル政府の労働社会保護省、モンゴル労働組合連盟、モンゴル経営者連盟の幹部らから、政治、経済、社会情勢の説明を聞き、意見交換を行った。また在モンゴル日本大使館、JICA社会保険実施能力強化プロジェクトのチームや、日本に多くの留学生を送り出している新モンゴル学園、国立モンゴル大学の中に設置されている名古屋大学・日本法教育センターを訪れ交流をしてきた。後半は保養地・テレルジで遊牧民の住居として使われているゲルに1泊、遊牧民の暮らしぶりも見てきた。



人口集中、渋滞、大気汚染

「ただ今、国家建設の工事中」。これがモンゴルの第一印象だった。

日本の4倍の国土があるが、約38万人の人口の半数が首都ウランバートルに一極集中、地方では遊牧民が移動しながらゲルに住む。

ウランバートルの街は、至る所でビルの建設工事が行われ、また車の急増に道路網整備が追い付かず、交通渋滞と排ガスによる大気汚染が深刻化していた。

現在のモンゴルは、政治も経済も安定しているとは言えず、社会資本の整備もこれからだ。前途には、さまざまな課題が待ち構えており、国家建設の途上という状況だ。雑駁に言えば、敗戦後の日本と同じような状況といえれば分かりやすいかもしれない。私たちが会った若者や企業人らからは将来への熱い気持ちが伝わってきたが、国づくりは始まったばかり、そんな現状をみた時、「工事中」という言葉が浮かんだ。

鉱山資源に頼る「一本足経済」からの脱却、社会インフラや教育の整備、年金など社会保障制度の構築など課題は山積している。ここ数年、モンゴル経済は世界経済の停滞で資源価格が下落、成長率が低下を続けており、経営者連盟などの話からは、日本などからの投資期待が強かった。

グローバル化のすさまじさ



草原を見下ろす高さ 40m のチンギス・ハーン像（ウランバートル郊外で）

司馬遼太郎の名著『草原の記』を読んで、一度はモンゴルに行ってみたいという念願が、ようやく叶った。司馬はこう書いている。「遊牧民は元来、物を蓄えない」「奇跡的なほど欲望少なく生きている」「物欲がすくないため家内工業もおこらず、資本の蓄積も行れず、結局はそれを

基盤とした近代化はこの草原にはうまれにくかった」「かねがね、かれらの存在そのものが詩であると私は思ってきた」。

とはいえ、この著作が出版された 1998 年から、20 年もたたないうちに、モンゴルの情景は様変わりしていた。地方を見ることはできなかったので断定はできないが、ウランバートルとその郊外を見る限り、「物欲すくなく生きている」という状況ではなくなっていた。

「これがグローバル化か」。モンゴル旅行中、このことが頭を離れなかった。「マネー経済」が国を席卷し、街には近代的なビルやマンションが建ち、遊牧民のゲルは郊外へと追いやられて、都市住民との貧富の格差も広がっている。

市場原理主義のすさまじいばかりの浸透力と、長く続いた社会システムをあっという間に壊して作り変えてしまう破壊力の一端を目の当たりにした。

モンゴルの「国家建設の壮大な工事」は、今後しばらく、早いスピードで進み、日本もそうだったが社会は大きく変動し、人々の暮らしや考え方も変わっていくだろう。それが「近代化」の宿命なのかもしれない。そういえば司馬は『草原の記』の中で、「近代とはカネの世のことである」と言っている。

まさに至言なのだが、それでも「天に近いモンゴル」は永遠であってほしい。（モンゴル訪問団団長）